私本閲読許可

火花 No7 7月4日

共産主義者同盟
関西地方委

はじめに――我々はどんな問題にぶつかっているのか。

すでに二度の関西地方委員会で白熱した討論がかわされ、全ロー地区末端までの論争となって来た同盟の党内論争は、次第に核心へと接近しつつある。当初は誰も気づかず、論争の矢頭に立っていた者さえはっきりさせることのできなかった結点へと、必然的な勢いで我々は進んで行っている。

6月××日の関西地方委員会では、論争の基本が現代革命論であるとされ、「前段階決戦」なしにいきなりファシズムと現段階過渡期世界」「世界革命戦争―世界赤軍―世界党を展望する党と軍、それとインビエトの関係」「内戦の形態」「中央権力闘争とマッセンストライキ」などをめぐって討論された。

すでに我々の間では、武装革命の敗北以降の日本階級闘争―帝国主義的平和時における自主闘争、カンパニア闘争の時代が、67年10/8―69年4/28にまるで一つの時代として過渡期として終ろうとしていることについて確認済みである。日本階級闘争は武装闘争の開始による権力闘争の時代へと飛躍しなくてはならないと、同盟は軍事を組織することをカナメとして党的転換を遂げなくてはならないと我々は提起した。しかし、ここで問題なのは、例えば「党直接の軍隊の上からの形成」、プロレタリアートの武装自衛による赤衛軍の建設から中央軍隊の形成へと進むものだという討論があったことに、結局、現代革命についての見解の違い、現代において革命党とは何かについての見解の違いがあらわれていることである。「軍隊建設をカナメとし」て党組織の転換についてと、我々は単なる党組織体制上の転換にとどまらず、権力奪取＝プロ独裁立を展望するに見合った党の政治的結集点の内容の飛躍的深化として提起したが、いまだその内容が不明確であるということが、基準をあいまいにしている。

権力闘争の時代の党は、世界観党、綱領の党でなくてはならず、そのプロレタリア権力への展望と、プロレタリア権力樹立を媒介にした社会主義建設と共産主義の内容とが密接につながったものでなくてはならない。そうでなくては樹立すべきプロレタリア権力の性格があいまいなものとなり、権力闘争を一歩も押し進めることができず、軍隊の性格もあいまいなものになるのである。我同盟は政治過程論的体質を上揚し、「戦略・戦術の党」という学問結果の内容が飛躍し、共産主義、社会主義、プロレタリアートの世界観的概念を一般的抽象的にとり述べていない段階から飛躍しなくてはならないのである。前段階決戦、世界革命戦争は、この革命の未来から規定されなければならない。合法闘争、カンパニア闘争の時代には党は世界帝国主義体制の同時打倒、日帝打倒、民族解放、社会主義諸勢力首領家特権官僚打倒、社会革命の立場の党であり、特に帝国主義列強打倒＝帝国主義軍隊の解体に中心目標を置いた党であった。すなわち、ブルジョア権力の打倒、転覆という点に中心を置いた党であった。このような「何でも反対」の党＝宣伝、煽動、教育の党から、つくり上るべき権力と未来社会を提起し、それへ向けて闘いを組織していく党へと我々は自らを変革しなくてはならないのである。我々は階級形成論と党組織論とを分離して考えなくてはならないのであり、現在の党を、いかなる軍事を組織するのかをめぐって、綱領確定を媒介に再組織しなくてはならない。

この間の党内論争の過程では、同じく「革命」「権力奪取＝プロ独裁立」という言葉でも、必ずしも内容が一致していないことが論争を混乱させ、上滑りの方向を打出せない主要因となっている。さらにあたってのプロレタリア革命の目標の内容を不鮮明にさせ、革命論をめぐって討論しても、それはお互いの政治リアリズムやコマルクス主義の常識を暗黙の内に前提にしているので、討論は根本的に納得させることができず、果てしなく続くのみである。また言葉の上で一致していないというようなわりを生れてくる。

だから我々はまず、権力奪取＝プロ独裁立とは何かというところから明にし、現代過渡期世界の歴史的な位置と世界革命戦争、現代過渡期世界の構造的特徴と世界革命戦争―前段階決戦について述べ、国家の階級闘争の主要な位置と性格について述べることにする。

＜戦略　戦術の党からの脱皮

①プロ独とは何か
②世界同時革命
③世界同時革命の戦略
④世界統一戦線
⑤インメルワルド左派の結集
⑥世界党＝世界赤軍の形成
⑦世界国家の形成
⑧世界国家の目的
⑨世界社会主義社会
⑩共産主義

Ⅲ　プロ独とは何か

わが同盟が、いわゆる「戦略＝戦術の党」から脱皮し、一歩前進するところのものは、我々が単に、帝国主義列強、又は帝政打倒という点を結集点にするだけでなく、世界革命、暴力革命の過程において、我々自身の権力をどのようにしてつくりあげるのかという点にある。

革命の過程を通してつくりあげられるプロレタリアートの権力は、普通プロ独として確認されている。すなわち、パリコンミューン4原則がそれである。

さてソレジョワ権力とプロ独の関係は、オ1にソレジョワジーの国家機関を廃絶し、これにかわりプロレタリアートの武装を中心とする全人民の武装組織を組織するということが何よりもまず必要である。

オ一に、この武装組織の下に、生産手段の国有化、共同所有を実現することである。

オ二に、プロレタリアートは、自己の代表をえらび、行政機関を簡素化し、これをプロレタリアートの選出した役人にゆだねるが、この役人は、プロレタリアートの平均賃金に従い、いつでもリコールすることができるようにする。

そして、この役人のもとに、国家を立法行政司法の統一された執行団体化する。

ところで今日、このプロ独をめぐっての労働者国家に関する論争は、こうしたコミューン的原則をわすれさり生産手段の国有化を行われているから社会主義であるという馬鹿げたことが言われているところにある。

今日のソ連に見られるごとく、生産手段が国有化されているにもかかわらず、これが社会主義と云えないのは、この4原則にもとづく政治的ソ連において行なわれていないということだけでなく、この四原則は、社会主義の計画経済にとって不可分の関係の上に立っている点をとりあげなくてはならない。すなわち、プロ独は、労働者国家の政治原則であると同時に、それは「労働者国家」のもとにおける生産原則でもあることをみなければならないということである。

今日のソ連は、プロ独が政治において保障されないことから逆にソレジョワ階級に転落しているだけでなく、それは、生産手段の国有化にもかかわらず、ここから当然導びかれねばならない「労働力量に応じた分配」が実現されていないという点にそのソレジョワ性をあらわしているのである。そしてこの点こそ、ソ連が、単にその特権官僚の打倒だけではなく社会革命を必要としているところである。

だから、今日の「労働者国家」において、プロ独を復活させるということは、まったく政治的、至当的な問題だと云わねばならない。

このように見てくると明らかなように、われわれが、ソレジョワ国家権力を打倒し、廃絶し、プロレタリア権力を樹立するということは、単に政治的、革命を意味するだけではなく、生産活動及び、生産と分配に至る革命であることを理解しなければならないと云うことである。

革命の過程において、プロレタリア権力を樹立すると云うことは、政治から「生産と分配」に至る全社会活動の革命を完遂するのだということを意味している。

Ⅳ　世界同時革命

ところで、われわれが、世界革命＝世界同時革命と言う場合に当面しているところの問題は、今日の労働者国家相互の関係がしめしているとおり、資本主義の不均等発展にもとずく、各民族国家間の生産力の格差＝生産手段の発達の格差＝によって、民族的プロ独相互に不可避的な不平等が生まれていること、この不平等に対してどのような態度をとるべきかという問題にほかならない。

スターリニストは、この不平等をみとめ、労働者相互の民族自決、その上に立った連邦主義をとっているところにオニの問題がある。この「民族自決」＝「連邦主義」は、それぞれの民族的プロ独によって成立している以上、至当的

には、民族国家の相互の利害対立を止揚するのではなく、むしろ民族間の対立、斗争、戦争をひきおこすか、さもなければ、強く大きな国に小国が屈服することによって強制的に結びつけられた連邦になるかのいずれかにほかならない。そこで問題の核心は、この民族的プロ独が、自らの「ヌルジョア的民族国家」の障壁」を打ちやぶることはあるそらく困難であるという点にある。

以上のことは、プロレタリアートが、民族的階級から世界的な階級に自らを高めるためには、何よりも、この「ヌルジョア的民族国家の障壁」を打ちやぶることの出来る手がかり、土台を、帝国主義列強の打倒の過程をとおして実現しなければならないということである。

これが、今日の労働者国家に要求されているオニの問題であると同時に、我々のプロ独が当面する直接の問題ともある。すでに、今日の「労働者国家」「帝国主義下の革命」として直進諸国の「民族解放、社会主義」を共通して当面しているところのものは、まさにこの点にある。

現代革命の根本問題は、プロレタリアートが民族的階級から世界的階級に自らを高めるためには、何が必要であろうか、何によってその能力ということであり、いわゆる「三プロソウの統一」、現代世界の統一的把握ということも、この点にかかっているのである。

四 「世界同時革命」の戦略

今日の世界階級斗争は、「世界同時革命」「世界階級戦争」を要求している。それは主として二つの原因にもとづいている。一つは、巨大に形成した帝国主義国家権力を打倒する為には、国際的には帝国主義列強の世界のプロレタリアートと人民に対する反共、反革命、侵略と抑圧とに対して斗わねばならないからであり、帝国主義の鉄の法則である不均等発展が生み出さずにはおかない圧倒的、社会的、政治的、軍事的、そして文化的な矛盾の対立、斗争、戦争、恐怖、人類の見捨てプロレタリアートが解決しないかぎり、世界の破局、人類の滅亡ですくうことは出来ないからであり、それは、戦争や災害をまって解決するにはおそすぎるからであり、ここの被害をさける道は、共産主義、社会主義の側からのプロレタリアートの側からの先行的な、攻撃型の斗争が不可避的に要求されているのであって、それは、プロレタリアートが、この世界と歴史から戦争を基むりさる最后の戦争、決戦戦争をこれらの矛盾の根源である帝国主義に向けていどまなければならない。それは世界階級戦争であり、社会主義戦争であり世界革命であり、これは帝国主義列強に対するプロレタリアート民の「世界同時革命戦略」に導びかれねばならないということである。

国内的には、すでに世界戦略、世界観を失った帝国主義は、このますます深まり、激しくならずにはおかない世界観、世界戦略の動揺を、もっぱら権力を手段とした暴力とこの暴力の一方的強化、拡大によって、プロレタリア人民の国際的、国内的な斗争を圧制的に弾圧し、抑圧し、粉砕しようとするのであって、それは、圧制斗争、政治斗争にとどまることなく、社会的、文化的な人間の精神的物質的なあらゆる側面にわたって遂行され、強制されるのである。

だからプロレタリアートは、政治斗争、経済斗争だけではなく、その日常生活にわたって、この権力の重圧に対して、斗わざるをえない。国家機構をもって行なわれるブルジョアジーの攻勢に対するプロレタリアートの斗争は、権力の暴力にたいしてそうぐうせざるを得ず、だからまた、プロレタリアートは、その生存をかけた斗争、即ち人間の根源的な権利にもとずいた反抗斗争によって立たねばならない。

それは国家権力の暴力に対して、プロレタリアートの暴力をもってする斗争が、日常的に常態化するのであり、また常態化しているし、又しなければならないのである。

この国際的、国内的にみられる今日の階級斗争の基本的性格こそ、プロレタリアートをして、圧迫から政治へ、政治から軍事へと常に日常的に高めずにはおかないのであり、このことは、権力の力に対するわれわれの力の関係を日常的に軍事的にとらえかえすことの必要性をわれわれに強制するのである。

そして、これは、世界プロレタリアートの総力を帝国主義列強の打倒に動員しなければならないことを意味する。

さて「世界同時革命」「階級戦争」を要求する第三の原因というのは、二の資本主義、帝国主義の不均等発展がつくりだした世界構造、そして今日の「労働者国家」が当面している、更に現代革命が当面している中心中の中心問題である。それはプロレタリアートを民族的階級から世界的階級（高めるには何を保障として可能であるかということに他ならない。

すなわち世界を単一の共同体にするにはどうしたらよいかということである。

プロレタリアートの国際主義は、国民相互の親睦でもなければ、又一般的な観念でもない。プロレタリアートの国際主義とは、常にプロレタリアートを国境や国籍に左右されない目的と利益に向けて高めることであり、特に民族的階級から世界階級にプロレタリアートを高めることに他ならない。そのためには、プロレタリアートは、自らを世界的階級、世界を「単一の共同体」に組織することが出来るのであり、世界社会主義社会、共産主義を建設することが出来るのである。

現代の革命が、又プロレタリアートの革命のすべてが共有する本質的問題こそ、プロレタリアートに世界同時革命を要求する第三の原因にほかならない。

そして、この世界同時革命を勝利に導くものは、プロレタリアートの暴力以外にありえない。この暴力の生誕と生長、発育と完成の過程こそは、階級闘争に生命をあたえ、生き生きとした革命の高揚と大衆の昂揚をひきだすことが出来る。

今日、このプロレタリアートの暴力は、どのように形成されているか、それは主として二つの領域においてすでに形成されている。一つは、プロレタリア独裁にもとずく「所有者国家」の存在であり、もう一つは、後進諸国の民族解放闘争のうちにある。

この二つの大きなプロレタリアートの暴力を帝国主義列強を打倒する世界階級闘争、世界同時革命戦略の有効な構成部分にくみこみ、帝国主義の国家権力の巨大な暴力の圧制下におかれているプロレタリアートの階級闘争と革命を導くための帝国主義下のプロレタリアートの暴力の強化に利用することは決定的に重要なことである。

ここをはなれて、今日の階級闘争と革命はありえない。だから今日の階級闘争と革命は、二三から、目的意識的に計画され闘われねばならない。その目的は、帝国主義軍隊の解体の一点に集中されねばならない。すべての種類と方法と形態の闘争は、全世界のあらゆる領域から、この帝国主義軍隊の解体に向けて集中されねばならないし、階級闘争の発展というのは、これらの発展実現されているかにかかっているのである。この過程をとうしてのみ、ソ連をはじめとした他の変革革命も又可能である。

（7ページより）

は人間の解放が問題にならない意味のないそういう社会であろう。何故なら、共産主義は人間に対する強制や抑圧がない社会であるから「解放」ではなくごく自然の感情の世界そのものが、人間を要求的に解放していくからであろう。そこでは理性と感情の対立などおそらくないのである。

今人々は、共産主義が人間の解放だと言う。しかし歴史は、人間の解放が、共産主義においておこなわれるのではなく、この共産主義に至る全過程において解放されてゆかねばならない。

解放とは、未来にあるのではなく、未来に至る歴史過程において、人間がどのように生きるかということに他ならない。

そしてこの解放の過程こそは、すでに歴史の外皮を化した帝国主義を打倒し、全世界にわたるプロレタリア独裁を獲得し、人間が、自らの外につくりあげた一切を、人間が自らのものにしてゆく過程にほかならないのだ。

今日、人間はあまりにも多くのものを自らの外につくり出してしまっている。もはやこれ以上、自らの外に何かをつくることは不可能である。

だからプロレタリアートは「全世界を獲得」しなければならない。

④ 世界統一戦線

帝国主義・帝国主義列強を打倒するために世界のあらゆる国のプロレタリアート・農民・小ブルの意志と力を統一させるための統一戦線の形成は、今日何よりも重要である。それだけが、プロレタリアートの利益を実現する道であり、又、その他の人民（新旧中産層をはじめとした）の共通の利益でもある。こうすることによって、各国内部の統一戦線も有効になるだけでなく、確実なものにすることが出来る。

今日、この統一戦線を形成する要素は、プロレタリア独裁国家に統一されているプロレタリア人民であり、帝国主義下のまだ権力をにぎることの出来ていないプロレタリアート人民であり、そしてすでに今日ではほとんどの後進国でそうであるように、民族解放闘争を闘っており、この意味では、ますます二重権力状況の一方をになっている解放闘争に従事しているプロレタリアート人民の半権力である。

この三つの要素こそ、今日の世界統一戦線を形成する精神的、物質的基盤にほかならない。

この成長、発展の程度の相違する三つの要素を、単一の統一戦線として形成するところのものは、この三つの要素を統一することの出来る綱領的意志一致にほかならない。なぜなら、そうでないかぎり、この三つの要素を密接不可分に結びついた一つの有機的な運動として統一することは出来ない。

この発展の相違する三つの要素を統一する理論的な環は、一般的には階級闘争ということであるが、より正確には、それはまさに国家の問題であり、民主主義の問題にほかならない。それは、バラバラな問題ではなく、民主主義の発展の程度の問題であることとわれわれは深くレーニンに学ぶことが出来る。

いわゆる「三ブロック」をめぐる理論問題とは、民主主義に対する問題である。そして、世界的な民主主義の秩序をわれわれが導入しないかぎり、すなわち、プロレタリアートの世界国家の問題を導入しないかぎり、すなわち、プロレタリアートの世界国家の問題を導入することなくしては、この「三ブロック」の問題、国家、半権力、そしてプロレタリアートの階級闘争を統一することは出来ないのだ。

われわれは、この世界国家・世界民主主義の理論的導入によってだけ、この三つの要素を統一的に導くことが出来るし、世界的な統一戦線を有機的に構成することが出来るし、ここに、世界階級闘争、世界同時革命を首尾一貫して共産主義に向けて導くことが出来るのである。

⑤ ケンメルヴァルド左派の結集

われわれは、すでに昨年の春以来、ケンメルヴァルド左派の結集に向けて努力して来た。国際部活動の強化と、昨年度の8/3集会等の活動は、すでにアメリカにおける黒人運動、反戦左派をはじめとする米国左派統一戦線の形成、ヨーロッパにおける反NATOヨーロッパ統一戦線の形成、日本における左派の反帝統一戦線の形成になにがしかの成果をおさめてきた。

そして、更に、OLAISから中国へ、この左派の世界各国における結集こそ「世界統一戦線」を象徴する。これこそプロレタリアートの世界解放を支えている今日の精神的、物質的基盤にほかならない。

「ケンメルヴァルド左派」の形成こそは、これら世界の左派によってのみ可能である。

⑥ 世界党 ― 世界赤軍の形成

われわれは、インターナショナルの根本問題を世界党の形成に求める。それは、コミンテルン二回大会の規定と同様、「世界単一党」にほかならない。

そして、この「世界単一党」は「ケンメルヴァルド左派」を物質的基盤とし、この成長の上につくりあげられるだろう。

⑦ 世界国家の編成

帝国主義国家の解体、帝国主義列強の打倒の過程をとおして、われわれは、武装蜂起、連邦主義に対する党派闘争を組織し、世界党とその世界赤軍を基盤として、プロレタリアートの世界独裁、プロレタリアートの世界国家を編成しなければならない。

この世界国家は、はじめは、世界党、世界赤軍と各国のプロレタリア独裁権力によって編成されるだろう。そして、民族主義、連邦主義に対する闘争をとおして、各国の、はじめは形式的民族的プロレタリア独裁権力は世界国家の本体にしあげられる。

⑧ 世界国家の目的

こうしてつくりあげられる世界国家の目的は 以下の

(a) 世界を単一の共同体に組織することである。

(b) この共同体は、まず、世界社会主義の建設であり

この経過の目的は、共産主義である。

(c) 共産主義は、新しい人間に基づいた真の人間の歴史のはじまりである。そして人間が 自然の変革をとおして、増々発展、成長する社会である。

(d) 世界国家の結成から、共産主義に至る一連の歴史移行過程は（世界）社会主義の時代である。それは、世界国家の死滅の過程であり、ブルジョワ的権利、思想の死滅の過程でもある。

(e) それは、精神労働と肉体労働との、都市と農村との消滅の過程、分業の消滅の過程にほかならない。

(f) それは、教育と計画経済と階級闘争をとおして実現される。教育は、芸術と科学と労働そして階級闘争によってこの総合的運用によってはじめて可能である。階級闘争は、基本的には、教育の一環であるが、特に、個人主義、民族主義に対する闘争を中心としなければならない。計画経済は、もはや、戦争を必要としないこの社会においては、極度の工業化政策（国防を政治的任務とした）を必要としないが、やはり、生産手段の発展が社会発展の物質的な基盤である以上、工業を中心としたものでなければならない。

(g) 社会的側面の中心は、なによりも、精神的、物質的交通に依存している以上、全世界に、この交通網の完成をはからねばならないが、この最後の完成は、言語の統一である。しかし、この言語及び民族文化（特に芸術）の伝統は、基本として人間の美食法、及び新しい倫理観の完成によってのみ解決される以上、長期の時間と努力を必要とすることを、又、全済的、政治的な発展と教育によってのみ解決される問題である以上、あせってはならない。長年にわたる階級闘争の歴史を考える時、各民族、人種の慣習、伝統を尊重し、文化的自治を認めねばならない。

(h) 世界国家を中心とする世界社会主義の生産関係の基本は、全世界にわたってパリコミューンの原則を貫徹するプロレタリアートの世界独裁にほかならない。すなわち世界国家の官吏の中から、特権官僚を生み出さない基本的保障をここにもとめ、政治家、学者、テクノクラート、そして、赤軍をになった軍事戦略、戦術家達をして、その与えられた権力、特権を観察し、誤った方向へそれさせないところの保障は、世界党を中心とした敵対性と、プロレタリアート人民の力にもとづいた組織的、機構的保障である。この組織、機構をパリ、コミューン四原則にもとづいて規律だてられる。

(i) この保障のもとにおいてのみ生産関係の全済的物質的側面である生産手段に対する資本を定めることが出来る。すなわち、世界国家は、帝国主義の母斑である生産手段の民族国家的所有にもとづく全済的不平等を止揚して、生産手段を世界国家の所有、管理、統制下、搾取にあき、もって世界的共同所有を実現してはじめて、民族間、人種間の対立、闘争、戦争を消滅する物質的基盤をつかむことが出来る。（J）（K）は略）

⑨ 世界社会主義社会

世界社会主義社会は、国家及び階級の死滅」でゆく過程である。ムーニンは「国家と革命」において「国内にどんな一国的であるが故に、国家階級の死滅は、ゆるやかな自然死として現れ、党及び国家の目的意識的な努力の過程としてとらえにくくなっていた。

だが、一たんブルジョワ的民族国家の消滅」をわれわれが問題とし、この民族国家の世界国家への解体再編としてとらえたならば国家の死滅はもっと具体的な我々の目的意識的な努力の過程としてあらわれてくる。

そして、これは、まずもって民族的階級として自らを組織しようとするプロレタリア階級が遂に世界的階級として自から全高める過程をとおしてはじめて自分を死滅の過程を明らかにすることが出来る。

「世界社会主義社会」この過程を通してだけ、世界の工業と農業の 部

市と農村の分業を止揚することが出来るし、又、分業の根幹をなす精神労働と肉体労働の止揚を獲得することが出来る。これらの国家、階級、分業の止揚はまずなによりも全世界にわたるプロレタリア組織の興こうをとうし、生産手段を世界的に組織することによって生産力と消費、これを結ぶ社会（精神的物質的交通体系）の結成をとうしてはじめて可能なことであり、全世界にわたる「労働の量に応じた分配」がおこなわれることをとおして、この「労働の量に応じた分配」のもつ不平等、ブルジョア性を人間が克服することが出来るのである。

すなわち、哲学的には、この「労働の量に応じた分配」の世界的に一つにされた物質的基礎を媒体としてのみ、プロレタリアートをして歴史的存在としての類人類として自らを組織せしめることが出来るのである。

世界、この人類は、世界社会主義がそうであるように、それは共産主義的人間に至る過渡として、最後のブルジョア性の残滓を体現しているのである。近代社会の成立過程をとうしてあらわれた人類（神と自然に対する人間）すなわち、対立的独自性をもった歴史的存在としての人間相互の対立によって生まれる観念にほかならないからである。「労働の量に応じ分配」のもつブルジョア性の消めつ、すなわち、かく分配の基準（個人的な）を不必要とする社会すなわち能力に応じて働き、必要に応じてうけとるところの共産主義社会の出現をとうしてはじめて、労働と分配の基準は不必要に、無意味になることによって、このような人間の自らの生産物に対するかかわりが生まれることによってのみ、類的存在としての人間＝個人も又人間の社会を、このアトムの集合体としての人類という観念を不必要で無意味なものとすることが出来るのである。

このような人間の自らに対する観念の変化と、神と自然に対する対じ的存在としての自[illegible]ることが出来るのである。

[illegible]として個人間が止揚さ[illegible]、個体を基定観念とす[illegible]子、常識をとおりこしたとこ[illegible]トン古典力学の世界[illegible]を止揚し[illegible]

直力学的に言えば、ちょうどわれわれが、共産主義が遠未来のものと知っているように、今日の相対性の原理もまどこかはるかのとおくから重力波がやってくると知っている。しかし共産主義は、もっと新しい科学に依存することになるだろうし、それは社会主義の過程で生まれるだろう。そのようにして生れる共産主義を、今日の我々の意識と科学ではとらえることは出来ない。ただわれわれは、マルクスにとって共産主義が、どのような文明観によってみちびかれたかについて少しみておく必要がある。マルクスにとって共産主義は「自由の王国」であった。しかし、自由とはブルジョア的权利である限り、共産主義は「自由の王国」ではないのである。何故なら、共産主義は、自らが自然であるとともに「神」だからにほかならない。なぜなら自然と神とは、分業にもとずく肉体的労働と精神労働との、階級と都市との投映された観念として生れるのだから。分業の止揚された共産主義における人間にとって、おそらくは神も又自然も、それゆえに人類とか人間といった言葉は問題にならないにちがいないからである。

能力に応じて働き、必要に応じて受けとることが共産主義の社会的規定とされているが、問題は、共産主義ではその前史において働くことは苦痛であり、若しくは喜びだという考えだった労働と分配の基本観念が変わってしまうところにある。

労働はよろこびであり、たのしみであり、おそらく消費や分配などというのは、どうでもよいといった観念が生れるにちがいない。

このような価値基準のてんとう上もとずく社会が共産主義である。このような社会では自然は何か、人間に対じ的なものではなく、人間自身のことに他ならないであろうし、共産主義が永遠の自然に対する人間の働きかけと言われるとき、それは、おそらく自己自身への働きかけを意味するだろう。そして神は人間の上に立つ、不能の主宰者なく、まきしく人間自身の無限の能力としてうけとられることによって、この不可思議な人間に対するソンケンと想い、愛に変わるだろうと言うことである。

このような人間のおりなす社会、共産主義とは何だろうか、…

それをわれわれは知りたいと思う。しかしおそらくこれ以上にまだ知ることは出来ない。

今日の人は、共産主義が人間の解放だと言う。共産主義

（4ページにつづく）

〈2〉 現代過渡期世界と前段階決戦

以上のように、世界＝一国同時革命を把握し、現代過渡期世界を変革していく世界革命戦争の歴史的意味を理解するならば、この立場と視点から、現代過渡期世界の具体的構造を明らかにし、世界革命戦争が発生し、持続し、拡大する条件を見出すことができる。

例えていうならば、62年のキューバ革命の勝利がどうしてもたらされ、その後のチェ・ゲバラによる中南米革命戦争形成の試みがどうしてなされたのか、64年以降のヴェトナム革命戦争の勝利的展開とアジア革命戦争への拡大、世界的なヴェトナム反戦→自国帝国主義打倒闘争の拡大がなぜもたらされたのかということである。67年10・8羽田闘争以降の日本階級闘争の一つの時代しもこの自然発生的な世界革命の渦巻の波の中で現在に至っているのである。

これらの闘争は、後進諸国人民の民族解放、土地開放、帝国主義国人民の、別強の侵略、抑圧反対の要求から出発しながらも、それらの要求が内的に、裏民によるガイライ政権打倒、帝国主義が強打倒、自国帝国主義打倒の革命によってしか解決されず、従会革命をも内包した革命戦争として拡大しているのである。あるいは、革命戦争へと接近しているところに特徴がある。ヴェトナムにしろ、キューバにしろ、パレスチナにしろ、帝国主義が侵略戦争をしかけたのに対して人民の抵抗が高まったのではなく、新植民地主義という現代帝国主義特有の後進国支配に対して人民の攻撃的な武装闘争が、組織された部隊によって開始され、二重権力へと拡大するのに対して帝国主義の側が、侵略、反革命戦争を行なうという行なっているのであり、現在の世界情勢は、これら後進国人民の武装闘争を中軸としながら、世界的な革命と反革命との対立が進んでいるのである。

この階級情勢を一般的に帝国主義が戦争をやっているのだから、今日の[illegible]しくすい的帝国主義戦争であると見たところで、情勢の特徴をつかむことはできないし、こうした見地からは、帝国主義が戦争をしかけていないと、あるいは自国帝国主義が戦争を開始することを出来ないと言うことは、[illegible]帝国主義という[illegible]帝国主義

義戦争を内包しうる教条的あてはめがでてくるだけである。

では、現在までの世界階級情勢――自然発生的な世界革命戦争への開始――を生んだ現代過渡期世界の構造とは何であるのだろうか。

ロシア革命の成立を契機とした国際共産主義運動の全世界にわたる拡大は、帝国主義なしの市場再分割戦→植民地主義の再分割→帝国主義間戦争という、古典的な矛盾の発現を出現させ、第二次世界大戦の場合でも、第一回、伊でのファシズム形成をテコとしてファシズムの反ファシズムの世界戦争として帝国主義対立を発現させた。ファシズムも反ファシズムも帝国主義に変りはないが、イデオロギー的にはドイツファシズムに典型的なごとく、反ユダヤ主義をふまえることによって、反世帝国主義（特に米帝）と反ソと反共一体の帝国の利害を表現した。そして英、米、仏は独、日、伊がファシズムによってブロレタリアートを粉砕し、自らの過剰資本を戦争の開始として処理しようとした段階で、「強盗戦争」、「自国のための戦争」として戦争に入ったのである。

〈3〉

経済的にはオイル資源、ゴム、[illegible]をはじめとして国家独占資本主義政策がとられ、この戦時統制経済としての国家独占資本主義経済は、修正されて戦後経済に持ちこされている。一九二〇―三〇年代のドイツ革命の敗北からフランス人民戦争の成立、スペイン革命の敗北に至る過程は一時代の世界革命戦争＝前段階決戦としての性格を色こく持っていたけれども、スペイン革命の敗北以降、全面的な帝国主義間戦争へと突入していくのである。以上からわかることは、帝国主義は過剰資本の累積＝矛盾の爆発と、階級闘争の昂揚とに対して、対処に苦しみ、国家独占資本主義政策、ファシズムの相互補完としてのみ切り抜けることである。

（戦後革命については省略）

戦後世界は以上現代帝国主義の性格をこうに露わにさせた。二次大戦は、再建金本位制の基軸国イギリスからの大量の金喪失をもたらし、三一年九月のイギリスの金本位離脱に続いて、米帝の金本位制の停止となり、各国で一様にとられた管理通貨制は

戦後IMF、GATT＝国際管理通貨制として編成された。この国際管理通貨制は マーシャル・プランその他 米帝の西欧 日へのドル撒布を裏付けとして形成されたが 米帝にとってこの援助は自らの商品市場確保のためでもあり、かつ 戦後世界革命の昂揚を抑えるためでもあったのである。だから、IMF、GATTの成立目体 NATO、安保その他の国際的反革命軍事同盟と密接につながっており 経済的にも米帝の後進国覇権経済援助 西欧 日に対する米帝の比重さでの軍事覇権、それに見合った後進国 西欧 日への商品輸出、資本輸出 米帝のドル撒布、資本輸出をうけた西欧、日の高度成長といったパターンが一つのものとして、戦後の資本主義の相対的安定を維持したのである。それは一国的には国家独占資本主義体制として現われ、福祉国家＝完全雇用政策をとったところの、諸階級、階層の体制へのくりこみ、政治的には戦後民主主義体制としてあらわれた。

この戦後世界体制は、戦時統制経済をうけついだ点からも見られるように、世界＝一国的に一貫して予防的反革命、階級闘争の解体の体制であり、また国家資本の拡大＋財政投融資、管理通貨制と体制的合理化による賃金統制など、価値法則への恣意的介入による恐慌のなしくずし的発現をはかるものである。

イデオロギー的には、現代帝国主義ナショナリズムを古典的な排外主義として形成できず、反共（反革命）ナショナリズムとして表現せざるをえない。このことの困難性は、戦後は体制間対立抜戦争が想定場面としながら、平和共存＝経済ナショナリズムとして裏返したイデオロギーであって体制を維持してきた。しかし、現在、西独、日の不均等発展と世界階級闘争の発展の中で、「アメリカによる平和」は危機におちいっているのであり、各帝国主義列強は平和共存から反共ナショナリズムへと変[illegible]。この場合、[illegible]ナショナリズムを[illegible]。

[illegible]は反工ヤ主義[illegible]として反共プロパガンダ[illegible]ナショナリズムをかたらえたが、現代とはどうなりかという問題に強制帝国主義はいかにされるべきか。

結論的に言うと、戦後帝国主義体制のカナメは、①米帝の圧倒的優位 ②階級闘争の圧殺ということであったが、この二つの条件が、①は日日の[illegible]日の[illegible]によって、②は④[illegible]中心に続けられた戦後世界革命の敗北によってうちやぶられた場合に動揺せざるをえず、③[illegible]の後進国民族解放闘争への介入を通じた民族ブルの帝国主義への[illegible]、後進国階級闘争の世界革命戦線の一環への飛躍が生まれてくる。また、このヨーロッパ＋ベトナムとしてあらわれた世界革命戦線の端初的な革命的[illegible]は、一方では、中国文革山口宇大会を呼びおこしつつ、帝国主義列強の国独資体制はよって再編成していく構造を持つのである。そして、帝国主義の不均等発展の側からいえば、列強の[illegible]体制による対立の激化は、一方ではなしくずし的市場再分割戦を進行させ、いよいよ後進国人民、労働者国家への侵略、反革命攻撃を激化させるとともに、国家独占資本主義体制の再編を行わざるをえず、インフレによる価値破壊によって生活を破壊されていた小ブル、学生から官公労働者、中小企業、農民へさらに民間労働者へと矛盾展開させてゆかざるをえない。

戦後帝国主義体制の本質である世界＝一国的な予防反革命はこうして現在逆に世界革命戦争の端初的な[illegible]という大きな困難にぶつかっている。世界党の不在と、国際共産主義運動のスターリニズムによる歪曲という条件にもかかわらず、闘いが拡大しているのは、予防反革命を本質とした戦後帝国主義の矛盾性、危機性に根拠を持っているのである。これは結局、生産手段の私的所有を基礎とせざるをえないブルジョアジー本来の矛盾の表現である。しかし、問題なのはブルジョアジーがこの自らの危機をさらなる予防反革命でもってのりきろうとしており、イデオロギー的には完全にのべたごとく、反共ナショナリズムの形成へとなしくずし的に転換しはじめたことである。このことが列強の[illegible]なしくずし的変化としておこっていることであり、我々がなしくずしブルジョアジーとして注目してきたことである。[illegible]非常事態法制定後のドイツ、米のニク

8 なしくずしファシズムと佐藤政府打倒斗争

では日本帝国主義において、なしくずしファシズムはいかなるかたちで進行しているのか。世界革命戦争へ向けて、我々がこの日本において武装斗争を開始しようとする場合に、我々は右力の性格の分析を通して、「武装斗争の条件、その性格を定めていかなくてはならない。

日本帝国主義は50年代後半から60年代前半に至る重化学工業化＝国内的膨張期に民間基幹産業部門における合理化攻撃を通して組合を形骸化し、60年代後半の安定的中進国への外的膨張と国内企業の大型合併を物質的基礎として、民社－同盟－IMF-JCの社会排外主義の潮流を形成してきた。これこそ現在の日帝右力－佐藤内閣の社会的支柱に他ならない。だが組国危機と70年安保＝日米軍事同盟の強化と自衛隊のアジア派兵の実体的進行は、それ自体＝経済ナショナリズムで収納しきれず民間労働者を全面に反共ナショナリズムでもって統治しなおさなくてはならない事態をもたらしている。

そして他方で日帝は、IMF体制下の市場分割戦、資本自由化を通じた米国資本との競争戦に対しなくてはならない。現在進行している帝国主義的分割は反共ナショナリズム形成と国際競争戦の白熱の結力戦体制の完成への歩みなのである。

まだ組合形骸化の完了し得ていない公労協－官公労労働者への攻撃、運輸、通信、交通部門の再理化、社会資本への投資と、長時間制度廃止を基軸とする農業の切り捨て、再編、民間基幹産業における大型合併、合理化、中小企業の整理などは単一の計画性をもって進められており、帝国主義の分割戦は、「広域行政」等のかけ声とともに、都市化「広域行政」等のかけ声とともに、都市中心の機構の地域支配強化する統治様式にとってかわろうとしている。戦時中の町内会式と同様、地区住民の掌握を最終目標として進められているのであり、それはかつての[illegible]と類似とする支配様式から、個人を軸とする支配秩序を目的としている。この支配秩序の再編を日帝は反共ナショナリズムの形成と国際競争戦のための結力戦体制として進行させているのである。

以上の社会再編への反映が①防衛二法②刑法改正③内閣調査室の活動強化④出入国管理法案⑤大学治安立法⑥機動隊増強⑦星島逮捕－長期拘留－軍前機等などであり、大学斗争への機動隊導入の常態化、春斗、反戦斗争への機動隊介入などとしてあらわれている。

これらを帝国主義の暴力と反動のあらわれだとしてしまう動化してみても、何の結論もでてこないのである。では、何なる右力政体の変化であるのか、その要を具体的に明らかにしなくてはならないのである。そしてなくとも世界革命戦争の端緒的なシーンの開始という世界情勢の中で、官僚反革命を打ってしかざるを得ない日帝の新たな予防反革命体制として確認しなければならないのである。

現在のところ私たちはプルジョアジー内部の反革命の強化をこれまで通りの議会に直接的に依拠した政府からブルジョーニング政府的中間政府へ移行する準備を進めているものとして佐藤政府の性格を規定できる。佐藤訪米＝70年安保自動延長の過程とはそのような政治過程である。問題なのは、ここで我々のシーが最低限佐藤政府をはげしくなるような階級攻防開命をつくり出し得るかということである。端的に言えば機動隊を解体して自衛隊を引き出しうるかどうかということである。自衛隊の登場がブリコーニング政府的中間政府のメルクマールであり、この政府の反革命との対決を恒常的な武装斗争によって遂行するものとして、前段階決戦の時代が位置ずけられうるであろう。そしてこの「前段階決戦」の我々の勝利的展開＝自衛隊の解体は必ず国際的な反革命を呼ぶのであり、我々の革命もまた世界革命戦争へと飛躍してゆかなくてはならないのである。

前段階決戦＝国内での革命と反革命との攻防の時代に入ることができるかどうかが、我々の主体的力量によって決せられるものとして今秋の斗争を位置ずけなくてはならない。

さて、我々がこれしくずしてアナルズムを以上のように分析したのは、今秋の斗争を佐藤政府打倒斗争として規定し、我々の斗争はいかなるものとして準備されねばならないだろうか。また党と軍とはいかなるものとして形成されなくてはならないだろうか。まず何よりも確認しておかなければならないのは、我々の斗いの目標は、何よりも"権力奪取"に集中されねばならないことである。「権力奪取」とはブルジョア国家権力の政治的中枢を解体することであり、国家権力を決定的に打ち砕き破壊することであり、共産主義社会の建設、軍事的な目的意識性によって新たな権力を破壊の中から創り出す能力を備えるような準備の進展度合との問題で権力中枢の破壊を決行すべきだということである。すなわち、我々が作りあげるべきプロ独権力の内容から「権力奪取」は規定されなくてはならない。

11/25斗争に掲げられた「政府打倒・覆ケ関白粉砕」というスローガンは、この武装蜂起の定義からした場合、政府打倒斗争のスローガンである。すなわちこのスローガンを公然と宣伝し、斗いを組織することによって政府を打倒しなくてはならないこと、政府打倒の領域に斗いを発展させ、権力斗争の質をかかげ、一歩前進せしめなくてはならないことを大衆に宣伝することが、総括されるスローガンなのである。11/28斗争に表現された「中央権力斗争」の質とはこのようなものであり、階級形成を政府打倒へと促進すべき戦術としてあったことを確認しなくてはならない。それでは今秋斗争の性格はいかなるものなのか。前段階決戦への突入を獲得するものとして位置づけるならば、今秋斗争は11/25斗争から飛躍しなくてはならないし、単なる政府打倒を宣伝する段階に終わってはならない。だから今秋斗争はいわゆる中央権力斗争ではありえないし、それとメッセレストとの結合でもありえないのである。それは前段階決戦における内戦の型から規定されたところの武装斗争でなくてはならないのである。最低の条件として政府打倒は機動隊を粉砕する斗いをつくりとげることによって勝ちとられるか、どのようにして粉砕するのかが問われているのである。このような性格を持った斗いは日を設定したものではありえない。斗争の性格について文章上ではこれ以上のことは言えないがこの斗争の性格を定めてはじめて名称・規模の性格が定まっていくであろう。

11/28斗争前後の弾圧の状況と、我々が今秋斗争において突破しようとする政治の内容からして我々に対する破防法適用は必至である。我々はこの攻撃に対決できる非合法体制をかちとらなくてはならない。また先に述べたように、綱領の確定は急務であり、この作業を抜きにして、戦術的対応や組織いじりに走ってみたところで、今後の階級斗争を押し進めていくことはできないし、党的結集も、突撃隊建設を勝ちとることができない。綱領が確定され、世界プロ独の性格、建設すべき世界党―世界赤軍の性格が明らかになってはじめて党の飛躍と軍の性格が明らかになるであろう。そしてまた最も現実的な問題としては、日本における内戦の型を明らかにすることによってもまた、党と軍の性格が定まっていくのである。

(P9より続く)

ソン政权、日本の佐藤政权などの权力性格の变化を我々は政治の市場国家の戦争の中で解明しなくてはならない。

(1)

二つの帝国主義国家への方向こそが、現代革命に勝利すべき唯一の道である。勝利することにより我々はプロ独権力を実現し、社会主義建設へと歩を進めていくことができるのである。

しかし、ロシア革命はそうであったように、この帝国主義の手の反革命は世界的規模の世界革命戦争への本格的準備によって反撃をこうむることをまぬがれない。